

図解
考古学
辞典

水野清一編
小林行雄



図解
考古学辞典

水野清一編
小林行雄

東京創元社刊



図解考古学辞典

昭和34年6月20日 初版発行 定価4,800円
昭和55年10月20日 十二版発行

編 著者	京都大学 人文科学研究所	水野清一
	京都大学 考古学研究室	小林行雄
發行者	東京都新宿区 新小川町1-16	秋山孝男
印刷者	東京都八王子市 石川町2951-9	上野久徳
製本者	東京都文京区 関口1-16-1	鈴木俊一
製版者	東京都文京区 丸山福山町4	笹田誠一
發行所	東京都新宿区 新小川町1-16	東京創元社
	電話(268)8231(代)	振替 東京 6-1565

印刷・三省堂八王子工場 製本・鈴木製本所 製版・興陽社
1959. 6. 20 Printed in Japan ©

編者のことば

日本の考古学は、モースの大森貝塚発掘からかぞえても80年、京都大学に考古学の講座がひらかれたときからかぞえても40年の歴史をもっている。ほかの学問にくらべると、たしかに歴史はあさいが、もう充分に一人だちできる経験といえる。それにもかかわらず日本の考古学界には、まだ信頼できる1冊の語彙、1冊の辞典きえない。われわれが、この辞典の編集をおもいたったのは、一にこの不備を痛感したからである。

しかし、やってみると、これはなかなか容易ならぬ事業であった。わが国でつくる辞典であるから、いちおう日本の考古学を主にすることはいってみても、中国や朝鮮の考古学と全然切りはなしではなりたたない。また人類の出現、農耕牧畜のはじまり、都市生活の開始、物資の交流などという、人類史のひろい観点にたたなければ、正しい考古学にはなりえない。そのうえ、考古学という学問が、有形の物質、具体的な一定のばしょを直接の対象としている性質上、物そのものの博物学、そのなりたちの技術、ないしは地理、地質、人類学などと、およぶところはいたって広汎である。あるいは、この多方面の内容は、多人数の執筆によって克服することができるとしても、それを過不足なく簡潔に収録し、手ごろな1巻の辞典にしあげるということは、予想外に困難なことである。

とくに、この辞典では、ほとんどすべての項目に挿図をそえ、視覚的に理解しうることをはかったので、いちおう原稿ができるってからも、挿図の選択とわりつけに、またすくなからぬ時日を必要とした。項目の選定をはじめたときから起算すると、すでに8年の月日がたっている。われわれは、すこしでもよいものに

したいと、たびたびの変更をも辞さなかったので、出版者の小林茂氏には多大の迷惑をかけている。よくここまでがまんしてもらったと、東京創元社にたいしては、大いに敬服するほかはない。もとより、本書の執筆を分担され、挿図の検索や校正に協力された学友諸兄にたいしては、心から感謝をしている。収載した挿図もいちいち出典を明記できなかつたのは、あまりに繁雑にわたることをさけた体裁上のために、原著者にたいしては寛恕をねがいたい。

昭和 34 年 5 月

水野 清一
小林 行雄

凡　　例

1. この辞典のとりあつかう範囲は、日本を主とし、その周辺におよんだが、基礎的な事項については、地域をかぎらず収録した。
2. 編集の方針は、具体的な遺物の大系をしめすとともに、代表的な遺跡の解説に留意した。
3. 歴史、民俗、地理、地質、鉱物、生物などの、関連項目の収録につとめた。
4. 項目見出しが表音式かなづかいにより、あわせて歴史的かなづかいをしめし、さらに漢字まじりの表記をした。また外国地名、外国語は、原語あるいは原音をアルファベットでしめした。中国音は T. F. Wade システムをもちいた。
5. 項目には、反対語、あるいは類語をあわせて説明したものがある。
6. 外国語の発音は、主として慣用にしたがい、語形はなるべく形容詞形をさけ、名詞形によった。
7. 仏教語はサンスクリットの原語をしめすにつとめ、仏教語のあまりに特殊なよみかたは、かならずしも採用しなかった。
8. 各項目中の [I] [II] などは地域別、(1)(2)などはその他の区別による記述をしめす。
9. 文中に日本や中国の年号をもちいたばあいには、かならず西暦年数を併記した。西暦年数の表示法は、紀元後は数字のみであらわし、紀元前のばあいには数字のまえに前の字をくわえた。
10. 日本の地名は、昭和 34 年 1 月現在の市町村名をもちいた。
11. 度量衡はメートル法により、つぎの略号を使用した。

a	エーカー	kg	キログラム
cm	センチメートル	km	キロメートル
mm	ミリメートル	m	メートル
g	グラム	t	トン
12. 文中の * をつけた語は、項目として解説があることをしめす。この方法によって、関連項目の指示にかえた。なお、あわせて索引を参照されたい。
13. 項末の文献を日本文のものにかぎったのは、一般の読者のために、繁雑をさけたためである。『 』は単行本、「 」は論文をしめす。
14. 索引は、もとより 50 音順であるが、まず語頭の字によって排列した。同

各の字は画数によって排列した。太字体の頁数のところには、その項目があり、細字体の頁数のところには、言及された説明があり、イタリック数字のところには、関連する挿図がみいだされる。

執 筆

有光教一	岡崎 敬	岡田芳三郎
金闇恕	小林行雄	佐原 真
田中琢	坪井清足	長広敏雄
西谷真治	林巳奈夫	樋口 隆康
藤岡謙二郎	水野清一	村田数之亮

索引編集

小林行雄 佐原 真 田辺昭三

写真撮影

杉本雅夫

編集事務

阿部喜三 石橋義弘 緑川ほのか

目 次

編者のことば

凡 例

難訓文字一覧表

項 目

あ	1	た	604	ま	915
い	36	ち	639	み	933
う	79	つ	664	む	950
え	99	て	677	め	955
お	113	と	702	も	959
か	135	な	748	や	974
き	210	に	757	ゅ	998
く	264	ぬ	773	よ	1006
け	294	ね	774	ら	1015
こ	312	の	783	り	1025
さ	372	は	788	る	1036
し	395	ひ	829	れ	1038
す	504	ふ	847	ろ	1043
せ	528	へ	884	わ	1048
そ	583	ほ	892		

索 引 凡 例

索 引

難訓文字一覽表

数字は字画数を示す

あいくち・のみくち あいくち 合口・呑口

刀剣の拵(こしらえ)において、鐔(つば)がなく、把(つか)の縁と鞘口とが一平面でつきあうように作ったものを合口という。中世の短刀にこの式のものが多いので、「あいくち」といえば短刀のことにもなった。呑口の方は、把縁が鞘口の中にさしこまれるように作ったもので、呑まれるという意味。古墳時代にはすでに両者がみられる。これを合せ口式・呑口式という人もある。(小林)

あ

アイヌ Ainu

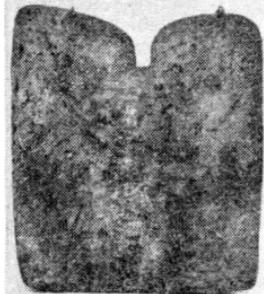
(1) 種族名。千島、樺太、北海道に住む。このうち北海道アイヌは人口約15,000でもっとも多いが、日本人との混血によって、だいぶ減少しつつある。その人類学的特徴は、平均身長159cm内外で日本人よりやや低く、皮膚の色はほぼ褐色、頭髪は黒色の波状毛、体毛ははなは多い。頭蓋容積は大頭型に属し、頭長(198.36mm)の大きいことは世界人種中最大の部にはいる。頭長幅指数は75.95で長頭型に属し、高さは低頭型である。頬骨弓幅は広く、顔面高は比較的低い。眼は深くくぼみ、二重瞼をもち、蒙古襞はまれである。鼻根は後退して、鼻の幅はいちじるしく広い。また四肢の長骨は一般に扁平で、古代人骨にみる特色をのこしている。(2) アイヌがどの人種に属するかという問題は、まだ解決されていない。すでに発表された説には、ヨーロッパ人種説、モンゴル人種説、南方人種説などのほか、古代アジア人種に属し、人種の孤島として残存したものとする説もある。そのうちではヨーロッパ人種説が比較的有力視されている。アイヌと日本人の関係についても諸説がある。日本石器時代人がアイヌであったとする小金井良精らの説はべつとしても、アイヌを日本石器時代人と隣接人種との混血によって生じたものとする清野謙次の説に対して、長谷部言人は石器時代人と混血したものがあればそれはアイヌであるという。さらにアイヌがかつて日本内地に住んだことがあったか、史上に*蝦夷の名であらわれるものがはたしてアイヌであるか、というような問題について、いずれも肯定説と否定説とが併存している。文化の面でも、アイヌ語は系統のわからない、孤立した言語であるといわれている。アイヌの生活は狩猟と漁撈が基礎になっている。現在ではアリ・ヒエなどの耕作をするが、こ



アイヌ



アイヌと諸人種との比較表



障泥(1慶州金鈴塚, 2正倉院)



赤絵壺(宋)



黒絵式

れは内地人からまなんだものである。(小林)

あおり あ 障泥(泥障)

装飾的な馬具の一種。布・皮などで作り、したぐらの下方に垂下して泥よけにする。中国の明器・彫刻などの表現からみると、全体の形は梯形、橢円形などの種類がある。馬形埴輪にもこれを表現したものがある。新羅の*金鈴塚などから発見された透彫金銅板を、障泥の飾とみることには異説もあったが、日本の後期古墳からは障泥にとりつけたとみられる鉄地金銅張金具が出土していて、裏面に獸毛の付着がいちじるしい。正倉院には熊皮で作ったものがある。(小林)

あかえ あか 赤絵

ふつう宋赤絵のことをいう。青花の上に絵つけをした明赤絵は、呉須(ごす)赤絵といって区別する。いわゆる宋赤絵は白磁の上に赤(酸化鉄)、緑(炭酸銅)を鉛釉として上絵(うわえ)つけする。つまり2度焼くのである。ふつう見るものは茶椀で、そのみこみに、ごくあらい筆でかいた牡丹文や文字をみる。往々うちに年号のあるものがあって、泰和とか正大とか金の年号がみられる。宋の天聖銘のものは偽物で、したがって、その製作された時期も北宋末、金、元にかけたころと推定されている。素地(きじ)は赤みがあり、白の下ぬりをしているから、従来考えられていた磁州窯とするより、当陽峪(とうようよく)の修武窯であろうといわれている。分布も河南、河北、山西を主とする華北である。茶椀のほかに玩具の人形があり、また赤、緑、黒の上絵をみる。これも宋末から元にかけてつくられたものであろう。(水野)

あかえしき・くろえしき あかえしき 赤絵式・黒絵式

古代ギリシア陶器の様式。(1) 黒絵式 black figured style は、影絵的な*幾何学様式(前10~8世紀)につづく前7世紀東方化様式にあらわれはじめ、前6世紀に完成了。その名称のように、図像の輪郭線内を黒の光沢色で塗りつぶした黒像式で、地色は赤褐色。しかし影絵とは異なって人物の眼、口、髪、衣紋など、動物の眼、口、毛などの細部は、先端の鋭くとがった工具を用いて、刻線であらわす。ときには細部に白、赤(紫)などの色も使用する。画題は神話が多いが、日常生活の図もある。前6世紀初頭にはコリント、アッティカ、ラコニア、イオニアなどの

諸様式がさかえるが、後半期からはアテネが中心となり、エクゼキアス、アマシスなどの名手がでて、ギリシア陶器の第1盛期をしめす。*アンフォラ、ヒドリア、クラテルなどにすぐれた作品があり、精確細密な刻線と輪郭とによって完成美をしめす。この装飾法は赤絵の發見とともに5世紀からおとろえ、ただパンアテナイアのアンフォラにのみのこる。(2) 赤絵式 red figured style は装飾法が黒絵式と反対で、図像を赤褐色のままのこして、他を黒色で塗る。しかし細部は筆で描く。ここに図像が自由に動的になる。刻線よりも描線は曲線を駆使するからである。画題は日常生活が主で、男、女、舞踏、宴飲など。この装飾法は前520~530年頃に、「アンドキデスの画家」で発見し、この世紀の末から前5世紀初めにかけユーフロニオス、ユーティミデスをへて、ドゥリス、「ブリゴスの画家」などの杯の類においてギリシア陶器の第2盛期をしめす。前5世紀がすすむとともに壁画の模倣に堕落し作者名もしだいにへり、前4世紀の壺は華美だが末期的である。(村田)

あかがい 細 赤貝

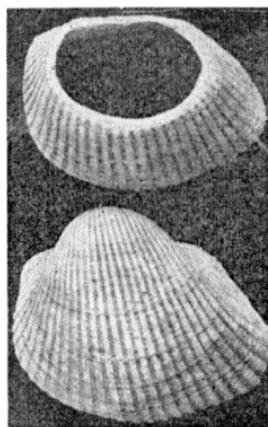
食用二枚貝。大型で殻頂から腹縁にむかって40~43本の放射脈がある。本州、四国、九州に分布し、主として内湾の深所にすむ。縄文式時代の貝塚から発見されるほか、これを貝輪に作ったものもある。たとえば岡山県津雲貝塚発見の第34号人骨(女性)が、右腕に7個、左腕に8個はめていた貝輪は、アカガイ製である。(小林)

あかし-げんじん 明石原人

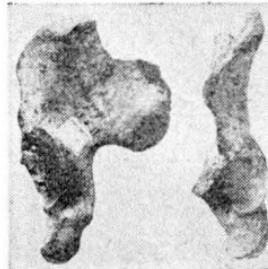
兵庫県明石市西八木海岸の洪積層から直良信夫が昭和6年(1931)に採集した人類腰骨をさす。当時一般には、この骨の出土状態が不明なこと、化石化の程度がたりないことから、これを洪積世人類の骨とすることに否定的な態度がみられた。その後、腰骨は戦災で焼失したが、長谷部言人は石膏型によって研究をすすめ、昭和23年(1948),これを北京原人にちかい洪積世人類のものとする学説を発表し、同時にニッポンナントロップス・アカシエンシス *Nipponanthropus akashiensis* の名をあたえた。しかし、一般にはみとめられていない。(長谷部言人「明石市付近西八木最新世前期堆積出土人類腰骨(石膏型)の原始性に就いて」人類学雑誌60-1, 昭23) (小林)



赤絵式



アカガイ

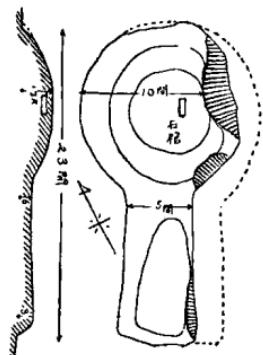


明石原人

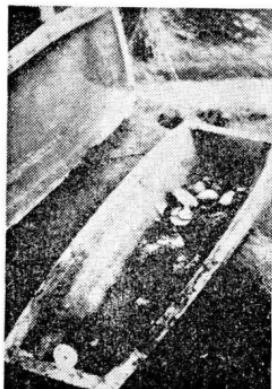
4 あがた



阿方貝塚の土器



赤塚古墳



赤妻古墳

あがた-かいづか あがたか ひづか 阿方貝塚

愛媛県今治市阿方にある弥生式時代の遺跡。近見山の南麓につづく標高10m余の丘上にあり、丘縁にそって細長く貝塚が形成されている。厚さ30cmの表土の下に、地点によって厚さ65cmの貝層、または厚さ40cmの土層があり、いずれも遺物を包含している。貝層は主として海産貝類からなり、ハマグリが多い。土器は前期のもので、広義の遠賀川式に属するが、壺形土器に凸帶の使用が多く、甕形土器に沈線の数が増加しているものがめだっている。杉原莊介はこれを阿方式土器と命名した。磨製石斧、石庖丁、石鎌、石錐、貝輪、串状骨器などが伴出した。(杉原莊介「伊予阿方遺跡・片山遺跡調査概報」考古学集刊2、昭24) (小林)

あかつか-こふん 赤塚古墳

大分県宇佐郡宇佐町高森にある前方後円墳。高台の隆起部に位置し、全長約40m、後円部径23m、前方部幅約15mに復原しうるという。大正10年(1921)、後円部の中央にある安山岩の板石を用いた箱式石棺の内部から、鏡、管玉、刀、斧頭などが発見された。鏡は波文帯龍虎鏡1面と三角縁神獣鏡4面であるが、後者はみな同範鏡の存在の知られているものである。(梅原末治「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」考古学雑誌14-3、大12) (小林)

あかづま-こふん 赤妻古墳

山口県山口市下宇野町赤妻にある円墳で、小丸山またはすぐも塚といふ。明治30年(1897)組合式石棺を発見、明治41年(1908)、また舟形石棺を発見した。組合式石棺には副葬品をいれる小室が付属していたといい、棺内には鏡、貝器、剣が、小室内には甲冑、刀、鎌、槍、巴形銅器などがあった。舟形石棺内には鏡3面、瑪瑙勾玉、管玉、ガラス小玉、櫛、針、刀などがあったといふ。なお埴輪の存在も注意されているが、土偶頭部2個を本古墳出土と推定する説があるのは、はたして確実であろうか。(弘津史文『防長原史時代資料』昭5) (小林)

あかにし

大型の巻貝で、高さ20cmくらいになる。螺塔は低く、肩に大きいこぶの列がある。本州、四国、九州沿岸の深さ10mくらいの砂底にすむ。貝塚から発見されることが多いが、貝輪などに利用したものは縄文式時代にまれに

ある程度である。(小林)

あかべ-よろい あかべ よろい 頸甲

くびまわりの胸と背とを防護する*短甲の付属具。ふつうは大小4枚の鉄板をとじあわせて作る。大きい2枚の鉄板は、長辺の中央がくびの太さにあわせて半円形に切りとられており、肩の前後をおおうように彎曲している。小さい2枚の鉄板は、くびの前面と背面とで、大きい鉄板の両端のつなぎ目にとじつけられる。すべて、くびに接する縁はすこし上方に折りたててある。頸甲には肩甲をとりつけるのが正式で、頸甲の両側縁には、そのための小孔を3カ所にうがってある。(末永雅雄『日本上代の甲冑』昭9) (小林)

アカンサス acanthus

あざみ属の植物。ハナウド。葉はアザミに似るが、1m内外の花茎上に穂状をなしてウドに似た花がさく。花冠は桃色から白色、基部は筒状。葉に「とげ」があるので、ギリシア名のアカントスは「とげ」の意味。その葉は古くから装飾文に応用され、前5世紀の墓碑の上端部、ついでコリント式の柱の柱頭に使われた。この柱の最初の例はペロポネソスのバッセのアポロン神殿(前5世紀末期)内部に立つ1本の柱である。ヘレニズム、ローマ時代の柱頭に愛用され、ローマ時代にはそれに動物の頭などが多くわわる。またビザンツ式の柱頭の基部の装飾にもなり、ロマネスクやルネサンスやバロックの工芸品にもさかんに使用されている。(村田)

アキナケス akinakes

アケメニッド朝のペルシア人がおびた両刃の短剣を、ギリシアの歴史家ヘロドトス Herodotus、クセノフォン Xenophon は、アキナケス akinakes と記している。ヘロドトスは南ロシアにいた遊牧民スキタイもアキナケスを使用していたと記している。ペルセポリスの宮殿浮彫ではメディアの武人がアキナケスをおびている。鞘口がハート状をなし、革紐で腰につる鉄剣である。その装具、ことに鞘には槌起文様を浮出した金板があった。アフガニスタン北部で発見された武人もアキナケスをおびている。南ロシアのスキタイ墳墓からは、黄金の浮彫をもったアキナケスがみいだされた。アキナケス型短剣はスキタイの



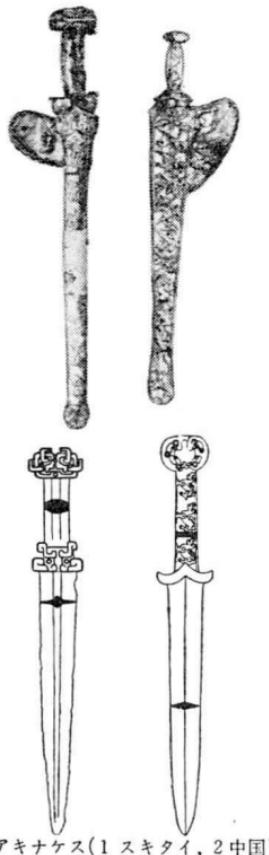
頸甲(福井県石船山古墳)



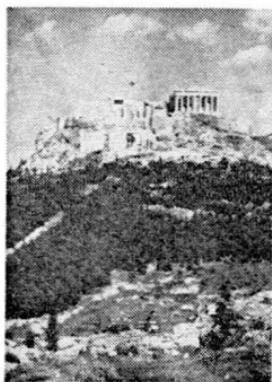
アカンサスとコリント式柱頭



アキナケス(オクサス黄金板)



アキナエクス(1 スキタイ, 2 中国)



アクロポリス(アテネ)

最盛期、前5～6世紀より3～4世紀ごろ、西はダニューブより、東はシベリア、モンゴルから中国北部に波及し、戦国時代より漢初におこなわれた。江上波夫は中国の史書にみえる「徑路刀」がアキナエクス形式の青銅剣であることを指摘した。わが佐賀県柏崎遺跡出土の触角式銅剣の形式も、かかる北方系銅剣のながれをくんだものである。(江上波夫「徑路刀と師比」ユウラシア古代北方文化、昭23) (岡崎)

アクロポリス akropolis

古代ギリシア都市の中核をなす丘。「高い町」の意味で、通例は城壁をめぐらして城塞ともなり、そこには都市の守護神や諸神の神殿、ときには政府のような公共建造物が建てられて、国家の宗教と政治の中心であった。最初はアクロポリスだけをポリスといったばかりもあった。典型的なアクロポリスはアテネのもので、70～80mの高さをもち、東西約300m、南北約150mの不整五辺形をした石灰岩の丘である。ここには、ミケネ時代には王宮があり、前7～6世紀から城壁をもちアテナ神の古神殿があったが、今日の偉觀が完成したのは前5世紀以来のことである。この丘は人工的に拡大された堅固な高い城壁をめぐらし、西端から階段をのぼると、プロピレイア(楼門)があり、その南に接してニケ神殿、丘の中央南よりに*パルテノン、北よりにエレクティオンの神殿が建っている。参道はパルテノンの北側をへてその東正面に通じるが、参道の傍や諸所にフィディアス作のアテナ・プロマコスの大青銅像や奉納像がならぶ。この岩の丘には聖なるオリーヴのほかには樹木はない。城壁に接して南麓にはペリクレスのオデオン(屋根をもった半円形の音楽堂)、ディオニソス劇場、医神アスクレピオス神殿、ユーメネスの柱廊(前2世紀)、ヘロディス・アッティクスのオデオン(後2世紀)がつらなって、現在もなお壯觀である。スバルタ人は、そのアクロポリスに城壁をもたぬことを誇りとしたが、諸神殿や劇場は作られた。コリントでは、アクロポリスにあたる丘は都市の背後にそびえる高い岩山で、アクロコリントとよび、主神アポロの神殿は市内にあった。なおテーベ、小アジアのペルガモンのアクロポリスも名だかい。(村田)

あさ 麻

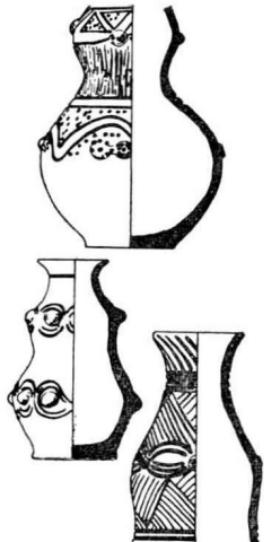
(1) 大麻(たいま)と苧麻(ちょま)とを総称して「あさ」とよぶが、大麻の方がはるかに纖維が長い。大麻の栽培はアジア、あるいは南ロシアにはじまり、東西にひろがったものであろうという。ローマ時代には大麻で作られたロープ断片の発見もあって、大麻が使われていたことはあきらかであるが、先史時代の西ヨーロッパで麻あるいはそれが栽培されていた証拠はまだみつかっていない。中国では『詩経』などに、苴は黄麻・子麻という名であらわれる麻があつて、その実は食用にもされ、新嘗祭や明堂の月次祭にもそなえられている。しかし「麻醉」という言葉があるのをみると、食用にはあまり適したものでなく、インドタイマにちかい品種のものではなかつたかと考えられる。苴麻は纖維があらく、主として履や縄索に用いられたが、苧麻の方は織物の材料としてさかんに使われ、『詩経』にも「紝をさらす」などとある。中国では一般に南方が苧麻、北方が苴麻のおもな産地で、宋末に木綿の栽培がさかんになるまで、絹とともに主要な衣服の材料であった。

(2) エジプトでは、前5000年代ごろと考えられるターサ期やファユーム期の新石器文化のうちに、苧麻の使用が知られ、ことに後者からは種子もでている。しかし、まだその野生種はエジプトで発見されていないから、西アジアから栽培種の苧麻がここにもたらされたものと考えられる。古代オリエントでも、苧麻は重要な織物の原料であった。苧麻の栽培は、その後しだいにヨーロッパ地域にひろがったが、スイス新石器時代の湖上住居址からはその根茎や織物の断片を出土しており、織物には赤・黄・青などの着色もみられる。さらに苧麻は、北イタリアのラゴザからもでており、中央ドイツからライン河方面におよび、ことに後者では炭化した種子のかたまりもでている。このようにその栽培は新石器時代のヨーロッパに広くひろがつていったが、イギリスでそれがはつきり知られるのは、今のところ青銅器時代からである。

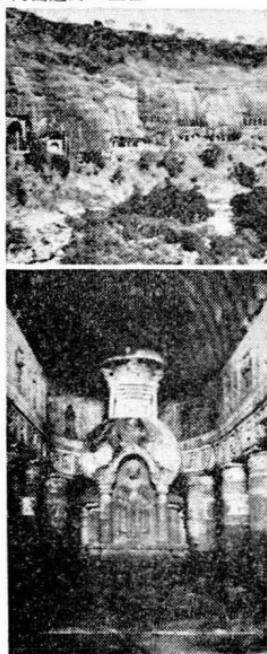
(3) わが国では、弥生式時代に苧麻やカジノキの纖維で布をつくっている。この時代の遺跡から多数出土する*紡錘車は、こうした麻をつむぐために使ったものであろう。もちろん古墳時代以降になっても麻はひきつづいて重要な衣料であったが、正倉院の麻布には商布・貨布・曝布・細布などの文字が布端に書かれているから、当時いろいろの布質があったことが知られる。室町時代以降、木綿が衣料として優位をしめはじめるが、しかし、その後も麻が衣料として愛用されたことは、あらためていうまでもない。(岡田)

あしかなもの 足金物

大刀の鞘金具の一種。鞘金具は鞘口(鯉口)、足金物、責金物(せめかなもの)、鞘尻(鎧、こじり)とならぶ。責金物は鞘の断面形にしたがって、扁平な環状を呈するが、足金物はその上部に帶執(おびとり)の革紐をとおす小環がついている。足金物の一種に、2個の責金物を上部で連結した形式のものがあつて、双脚足金物の名がある。古墳時代には单脚の足金物がふつうに用いられ、双脚足金物はその末期に使用されはじめた。また上部が装飾的に山形に作られた、山形足金物は奈良時代にはじまり、飾大刀に用いられた。(神林淳雄「双脚足金物に就いて」考古学雑誌26-7、昭11) (小林)



阿島遺跡の土器



アジャンター石窟

あしぎぬ 純

絹布の一種。「賦役令」の義解に細きを絹とし、あらきを純とするとある。上質の絹に対して「あし」とよんだので、とくに粗悪な絹という意味ではない。もちろん平織である。これを無地に染めたり、文様染めにしたものが、正倉院にのこっている。また「土佐国吾川郡桑原郷戸主日奉部夜恵調純壱匹、長六丈、広一尺九寸、天平勝宝七歳十月、云々」などの墨書のある純もみられる。令の定めでは正丁6人で純1匹を調とすることになっていいるが、1人あたりの調の量はしばしば変更された。(小林)

あじまーいせき あじま
あじまーいせき 阿島遺跡

長野県下伊那郡喬木村阿島北、土井場沢にある弥生時代の遺跡。天龍川の氾濫原ともいるべき低い段丘上に位置し、地表下約1.8mの深さに、土器を包含する黒土層があるという。昭和10年(1935)井戸を掘るさいに土器が採集されたのみで、学術的発掘はおこなわれていよいようである。土器は太い箆描きの文様のあるものと、櫛描きの刷毛目に類する文様のあるものとあって、阿島式土器の名をつけて報告された。(大沢和夫「信濃阿島出土の弥生式土器」考古学9-10、昭13) (小林)

アジャンターーせっくつ Ajantā 石窟

デッカン高原にあり、ヴァゴーラ川にのぞんだ石窟で、第1洞から第29洞までは550mある。断崖の高さは約80m。もっとも古い石窟は第9、第10洞で、前1、2世紀にさかのぼり、つぎは第16、第17、第19洞で6世紀前半、最後は第1、第2、第26洞で7世紀前半に属する。第9、第10洞はともに*チャイトヤ窟で、まんなかにストゥーパがある。古いものは装飾的な彫刻もなく、仏像もない、簡素な石窟である。壁画も開鑿当時のものから、つぎつぎの時代のものをふくんでいる。第19洞もチャイトヤ窟で、第16、第17洞は*ヴィハーラ窟である。前者は塔も壁面も彫刻でかざられ、後者は3方に小さい宿房をならべた石窟で、ともに豊富な壁画をもつ。第26洞はチャイトヤ窟、第1、第2洞はヴィハーラ窟で、後者は奥壁に祠堂をもうけ、尊像を彫刻しているが、壁画はすべての窟にあり、もっとも華麗をきわめている。(水野)

アシュールーいせき アシュー
ルーいせき Acheul 遺跡

アミアンの近くにあるサン-タシュール Saint-Acheul